

変化する学術情報の流通と中東研究文献——欧米文献を中心に

泉沢久美子

●アラブ研究文献と文献目録

アラブ研究が俄かに脚光を浴びたのは、やはり一九七三年一〇月の第四次中東戦争に端を発したオイルショック以降であろう。やや乱暴な例ではあるが、「アラブ」というキーワードを持つ文献について一九七〇年代以降の刊行点数を見てみよう。図書については、世界最大の図書館である米国会図書館の所蔵目録データベース（USMARC）、また雑誌論文については社会科学系の論文索引データベース Worldwide Political Sciences Abstracts と Econlit での検索結果から図1のような傾向がみられる。一九七〇年代と比べて一九八〇年代には図書は二倍以上、雑誌論文は五倍以上に急増したが、一九九〇年代には図書は減少に転じ、雑誌論文数が図書を超えている。近年、学術研究の発表の場が理工医薬系のみならず、社会・人文系においても図書から雑誌に転じているといわれるが、アラブ研究にもはつきりと現れている。そして、一旦減少傾向にあったアラブ研究であるが、二〇〇一年の九・一一同時多発テロやイラク戦

争等の影響から再び増加傾向にある。

一方、文献目録をみると、一九七〇年代後半以降、アラブ研究の急増に呼応するように出版が倍増している（図2参照）。当時、文献目録は、研究者にとって先行研究や類似研究の調査のための欠くべからざる研究ツールであり、ライブラリアンにとっては、研究資源の提供と共有化を図るための積極的な書誌活動であった。たとえば、*The Contemporary Middle East 1948-1973. A Selective and Annotated Bibliography* (GN. Atyeh 編, GK Hall, 1975) は、約六五〇〇件の図書・雑誌論文について丁寧な主題・地域別に分け、全てに解題を付している。文献目録の刊行が活発化した別の要因は、情報技術の発展にある。それまでの編纂作業は図書館の目録カード等を頼りに手作業で行われていたが、一九八〇年代から図書館や出版社において目録情報のコンピュータ化が一般化し、書誌データベースとして蓄積されるようになる。これ以降、文献目録の編纂に使われたデータは、書誌データベースに蓄積されたり、逆に既存の書誌データベースが文献目録作りに活用されるよ

うになった。たとえば、クリオ出版社の“World Bibliographical Series”はその例で、中東二カ国を含む各国別の文献目録が多数出版された。他に、中東の国際政治に関する論文約三〇〇〇点の文献解題 *The Middle East in Conflict: A Historical Bibliography* (GA. Schlachter & PR. Byrne 編, 1985) がある。しかし、アラブ研究が再び活発化した二〇〇〇年代だが、文献目録の刊行は減少したままである。

●インデックス・イスラミカス——冊子体とデータベース化

欧米語で発表された中東・イスラム研究をカバーする最も定評のある文献目録は、*Index Islamicus* である。これは、ロンドン大学東洋アフリカ研究所 (SOAS) のライブラリアンで書誌学者でもあった JD Pearson 教授の手による *Index Islamicus 1906-1955* (Cambridge, 1958) を起源とする。その後、五年毎に補遺版が刊行され、一九七七年には *Quarterly Index Islamicus* となり、一九九〇年代からは年刊版の刊行と書評論文を加えるなど拡充が図られてい

特集／途上国研究のための研究ツール——新・旧書誌情報を活用する

図2 アラブ関係文献目録

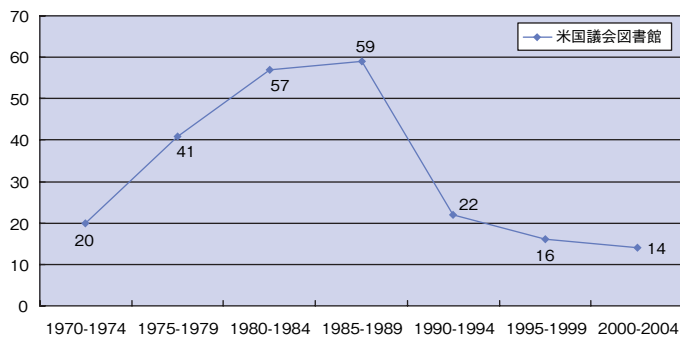
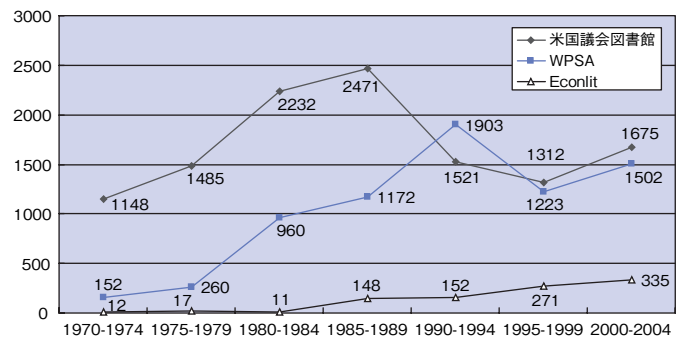


図1 アラブ関係文献の発行点数の推移



のIT化に対応して、これまでの全文献三
三万点以上をデータベース化し、CD-R
OM版とオンライン版での提供を開始した。
文献検索ツールとして更に利便性を高めた
が、冊子の刊行も継続している。また、こ
のデータベースを活用した有益な研究ツ
ルも刊行されている。まず、*The Concise
Biographical Companion to Index Islamicus*
(W. Bahr 著、Leiden, Brill, 2004) は、*Index
Islamicus* に収録した執筆者について業績
文献、略歴をまとめたイスラム研究者の人
名録である。また、文献目録では、 *Iraq: A
Bibliography Guide* (C. H. Beane and G. J.
Roper 著、Leiden: Brill, 2004) と *Afghani-
stan: A bibliography* (H. Bleaney and M. A.
Gellego 著、Leiden: Brill, 2006) がある。前者

る。これまで収録された通算一〇〇年以上
に渡る文献を数量的に見ると、最初の五〇
年間で約二万六〇〇点であったのが、一
九八一〜一九八五年の五年間だけで二万二
〇〇〇点となり、最近では年間約一万二〇
〇〇点で、毎年ほぼ一四%増加している
という。ここからも一九八〇年以降の中東・
イスラム研究の発展が窺える。目録の構成
は、中東・イスラム研究に合わせた専門主
題と地域・国別分類から成り、創刊当時から
ほとんど変わらないスタイルである。しか
し、一時期、刊行遅れが著しかったのも事
実で、編纂作業は決して容易でなかったと
推測される。

さて、この総合的な研究文献目録は近年
のIT化に対応して、これまでの全文献三
三万点以上をデータベース化し、CD-R
OM版とオンライン版での提供を開始した。
文献検索ツールとして更に利便性を高めた
が、冊子の刊行も継続している。また、こ
のデータベースを活用した有益な研究ツ
ルも刊行されている。まず、*The Concise
Biographical Companion to Index Islamicus*
(W. Bahr 著、Leiden, Brill, 2004) は、*Index
Islamicus* に収録した執筆者について業績
文献、略歴をまとめたイスラム研究者の人
名録である。また、文献目録では、 *Iraq: A
Bibliography Guide* (C. H. Beane and G. J.
Roper 著、Leiden: Brill, 2004) と *Afghani-
stan: A bibliography* (H. Bleaney and M. A.
Gellego 著、Leiden: Brill, 2006) がある。前者

は約六五〇〇点、後者は約五〇〇〇点を収
録する。いずれも地域の歴史・政治等の特
性に合わせた的確に主題分類された包括的
な文献目録である。書誌データベースは、
必要文献をピンポイントで探すだけのツ
ルとして利用されがちだが、冊子目録は、
主題別に配列された書誌情報の中から関
心分野のみならず、新たな研究テーマの発見
や同時代の研究動向を読み取るツールとも
なり得る。読み物として活用してほしい。

● 学術情報の多様化

一九九〇年代後半以降、急速なIT化に
よって学術情報の流通・提供方法が劇的に
変化し、利用者のニーズも多様化している。
すなわち、ウェブで提供する電子ジャーナ
ルやデータベースの出現によって、利用者
は図書館に向かず論文や新聞記事、統
計データにアクセスできるようになった。
一方、図書館の機能は、こうした電子媒体
の確保と膨大なコンテンツを提供するため
の窓口となるポータル構築に躍起となり
「所蔵からアクセス」に変化しているよう
に見える。

たとえば、中東・イスラム関係のポータ
ルでは、コロンビア大学、ハーバード大学、
テキサス大学の各中東研究センターの図書
館が充実している。また、興味深いのは、
ドイツの MENALIB: Middle East Virtual Li
brary である。このポータルは、一部有料
なのとレスポンスがやや悪いのが残念だが、
中東研究関係機関等の所蔵図書・論文、会
議資料等の各種データベースを横断検索で
きるのが便利だ。また、特定のトピックや
主題について情報の入口を提供する「パス
ファインダー」が充実している。これは、
利用者にまさに冊子目録の目次から関心主
題にアクセスさせるようなツールで、ライ
ブラリアンが文献に付加した分類や主題件
名によって誘導される。各書誌情報の内容
は、主題件名や関連ウェブサイトへのリン
クの他に、目次、明瞭さ、索引、リンクに
ついて三段階の評価指数を示すと共に文献
の利用対象層を明らかにしている。